



埼玉県立
浦和西高校

進路指導体制の構築

進路指導の体系化で 気付きを与え 生徒に自立を促す

◎自主自立の精神と高い学力を備え、社会に貢献できる人材の育成を目指す。異文化交流も盛んで、夏休みに2週間のオーストラリア研修を実施。2010年度から県の進学指導重点推進校の指定を受け、複数校による進路指導法開発のネットワーク拠点校となる

設立

1934(昭和9)年

形態

全日制／普通科／共学

生徒数

1学年約360人

11年度入試合格実績(現役のみ)

国公立大は、埼玉大、千葉大、お茶の水女子大、東京外国語大、東京学芸大、東京農工大、宇都宮大、埼玉県立大などに28人が合格。私立大は、青山学院大、慶應義塾大、上智大、立教大、早稲田大などに延べ515人が合格。

住所

〒330-0042
埼玉県さいたま市浦和区木崎3-1-1

電話

048-831-4847

Web Site

<http://www.urawanishi-h.spec.ed.jp/>

変革のステップ

背景

◎生活面の乱れなどから学力が十分に伸びなかった。生徒が進路を意識する時期が遅く対策が遅れ、進学実績が下降していった

実践

◎生活や進路に関し、生徒の気付きを待つ指導から、教師の働き掛けで気付かせる指導に転換。進路指導の系統性も重視

成果

◎27年ぶりに国公立大の現役合格者数が20人を超える。成績中位層の進学実績も向上し、現役合格率が高まる

再考を迫られた 自主自立を促す指導

自ら律し自らの責任で考え行動する「自主自立」を校訓とする埼玉県立浦和西高校。制服はなく、学校行事や部活動などは伝統的に生徒主体で運営され、校内は自由な空気に満ちている。「自由な校風の進学校」と地域からの信頼は厚く、卒業生が我が子を入学させるケースも多いという。

ところが、数年前、教師は自主自立の指導の在り方について頭を悩ませていた。進路指導主任の佐藤和平先生は次のように話す。

「自主自立の意味を理解して自律的に学校生活を送る生徒がいる一方で、学習規律の乱れや遅刻など生活面に問題の見られる生徒が少なくありませんでした。結果として、生徒の力は十分には伸びず、進学実績は年を追って下降していました」

また、課外活動が活発な半面、本気で進路を考えるのは3年生になってからという雰囲気があった。そのため、入試への対策が遅れて浪人する生徒も多かった。

『生徒の力を引き出せていない』と、私たちは問題意識を感じていました。しかし、校内には『生徒が自ら気付くまで待とう』『進路は生徒が自分で考えるもの』といった考えが根強く、生徒の自主性を重んじるあまり、

生活指導や進路指導にあまり積極的になれずにいました」(佐藤先生)

高校入学時の進路希望調査では、2000人近くが国立大への進学を希望するが、国立大の現役合格者数は例年10人程度。成績中位層の生徒の多くは伸び悩み、入試の直前に第1志望校を変えるケースも目立っていた。

入り口と出口の差が、あまりにもかけ離れている……。それが同校の教師に共通する問題意識だった。



埼玉県立浦和西高校
佐藤 和平 Sato Wahai

教職歴33年。同校に赴任して6年目。進路指導主任。「学校の主人公は生徒、教育の主体は教師」という意識で取り組む」



埼玉県立浦和西高校
坂江 隆志 Sakae Takashi

教職歴27年。同校に赴任して6年目。埼玉大に
出向中。「何事も一生懸命、真摯であるよう心掛けている」



埼玉県立浦和西高校
加藤 和江 Kato Kazuo

教職歴27年。同校に赴任して5年目。学習指導部。
「生徒にとって良いと思うことを優先する」



埼玉県立浦和西高校
磯貝 裕子 Isogai Hiroko

教職歴26年。同校に赴任して5年目。学習指導部。
「Where there is a will, there is a way.」を生徒に伝えている

赴任歴の浅い教師が 新たな視点で改革に取り組む

そうした状況にあった同校に契機が訪れた。2007年度、埼玉県の進路指導総合推進事業に指定されたのだ。同校は「進路指導推進委員会」を設置し、学校改革に着手した。委員は、校長、教頭、教務主任、進路指導主任、国語・数学・英語の教科の代表、及び有志の約10人だ。管理職が加わったのは、学校全体で取り組むという意思表明と、スピーディーに決定を下し、即座に実行に移したいという狙いがあった。

まず委員が手分けして全国の先進校を視察。良いと思う取り組みを列挙し、自校の実態に合わせてどうしたら取り入れられるかを検討して学校のブランドデザインを作り上げていった。

通常、次年度の学年団の組織づくりは、3月の人事異動発表後に行う。しかし、この年は08年度入学生生の指導について時間をかけて準備しようとして12月に早めた。08年度1年生の学年主任を務めた坂江隆志先生は次のように話す。

「本校での赴任歴が2年ほどの教師を中心に1年生の学年団が構成されました。そして、生徒が入学するまでの3か月間、『3年後を見通してどのように指導していくか』と議論を重ねました」

この期間は、教師の意識を高める上での効果も大きかった。担任を受け持った磯貝裕子先生

はこのように語る。

「学校改革は生半可な気持ちでは出来ません。当初は、本当に自分に出来るだろうかとプレッシャーを感じましたが、他の先生方と話し合い、具体的な準備を進める中で、気持ち前向きになっていきました」

入学直後の学習合宿で 学校の方針を「所信表明」

具体的にはどのような改革を進めたのか。

大学入試で不本意な結果に終わった生徒からよく聞かれたのが、「あと3か月あれば」という言葉だ。そこで、入試に向けての準備を早めるために、2年生12月に行っていた修学旅行を10月に前倒しするなど行事の流れを見直した。

進路指導が体系立てられていなかったことも課題だった。進路意識を育てるには1年生から学習習慣を付け、進路意識を高めることが重要だと考え、3年間の進路指導の流れを検討した。起点となる取り組みとして、入学式の数日後に「スプリングセミナー」(P.18写真)を行った。教科ごとに学習オリエンテーションを行い、予習や復習の方法を徹底指導し、高校生としての自覚を持たせた。

「高校生活は勉強が本分であることを強調して伝えるなど、生徒に対して学校としての『所信表明』を行いました」(磯貝先生)



2008年度の「スプリングセミナー」の自習時間に課題に取り組む1年生。学校生活の基本は学習にあることを生徒に意識付ける初期指導として効果を上げている

スプリングセミナーで教師が驚いたのは、生徒が個々に課題に取り組む自習時間の光景だ。自習の会場には、私語一つなく、鉛筆を走らせる音や辞書をめくる音だけがしていたという。

「本校の生徒はこちらが背中を押しさえすれば、入学時点でも学習に向かう力を備えているのだと分かり、改革への自信を深めました」（佐藤先生）

集中して授業を受ける環境づくりに徹底的にこだわる

同校の進路指導の特徴は、1年生から「自己理解」と「進路理解」を重視することだ。

これまでは校外模試も不定期で、自分の実力を客観的に把握できないまま3年生になる生徒が多かった。自己理解の不足により、適切な目標を設定できず、それが対策の遅れにつながっていた。そこで08年度からは、1年生から定期的に模試とスタディサポートを実施し、生徒が自分の学力を把握できるようにした。

生徒に進路の見通しを持たせるには、進路に関する具体的な情報が必要になる。そこで「進路ノート」の活用、大学説明会、大学教員による模擬授業、外部講師の進路講演会などにより、適切なタイミングでの情報提供を心掛け、進路理解を促している。

「自己理解と進路理解が結び付いた時に、生徒の中に目標が生まれます。1年生から個人面談や三者面談を行い、進路情報と生徒の意識を結び付けるようにしています。ただ、進路を決定するのは、あくまで本人と保護者です。我々は情報提供や面談によって、生徒が自主自立を実現する材料をそろえる役割に徹しています」（佐藤先生）

進路指導改革と並行して、目標実現に向けた学力向上への取り組みにも力を入れた。まず、生徒の自主性に任せていた生活面や学習規律の指導の在り方を見直し、丁寧な生徒・学習指導を行うようにした。08年度1年生の担任だった学習指導部の加藤和江先生は次のように話す。

「集中して授業を受ける環境をつくること

が先決だと考えました。遅刻や授業の受け方の指導など基本的なことばかりでしたが、生徒が自覚し、自ら変わるまで続けました」根気強い指導により生活面は徐々に改善した。例年は全学年で毎日百人を超える遅刻者がいたが、最終的にこの学年ではほとんどいなくなった。授業態度も目に見えて良くなった。続いて、隔週土曜日の授業実施、放課後補習や週末課題の充実などにも取り組んでいった。

日々の指導の積み重ねが生徒に大きな変化をもたらす

一連の指導を生徒はどう受け止めたのか。最初に見られたのは反発だった。「スプリングセミナー」の詳細は入学前に告知しておらず、普段の課題や補習の量も先輩に比べてかなり多かった。入学前に抱いていたイメージと異なる高校生活に、「どうして自分たちの学年だけ大変なのか」「こんなに勉強させられるのなら入学しなかった」という声が聞かれた。

「かつての本校を知る保護者からも、『課題が多過ぎる』といった声が寄せられました。それでも、私たちは生徒の力になると信じ、初志貫徹の姿勢を取りました」（磯貝先生）日々の指導は生徒との根比べだったと、加藤先生は振り返る。

「模試を受けない生徒を見つけたら、放課

後に個別に呼び出して理由を聞いて注意し、一人で問題を解かせました。そうした指導を粘り強く繰り返すうちに、徐々にですが、私たち教師の言葉を受け入れる姿が見られるようになってきました」

生徒の意識の大きな変化を感じたのは、修学旅行の直後だという。

「修学旅行後の学年集会で『高校生活の楽しい行事は全て終わりました。これからは全力で大学入試に向けて頑張ろう』と話す、生徒の顔つきがぐっと引き締まるのを感じました。2年間かけて生活・学習指導を続け、自己理解や進路理解を促す指導を行ってきたことで、我々教師の『本気度』が伝わったのでしょうか。意識は一気に受験に向き、スムーズな切り替えが出来ました」（加藤先生）
良い緊張感を持続させるため、2年生の3月までは、大学説明会や各教科の受験勉強講座などイベントを立て続けに実施。3年生になると、模試や入試情報の提供と共に、面談を繰り返して、「第1志望は必ず受験しよう」と強調して伝え、高い目標をキープさせた。

教師が気付きを促す指導から 生徒が影響し合い気付く状態へ

取り組みの成果は、08年度入学生が受けた11年度入試の結果に表れた。国公立大の現役合格

者数は、27年ぶりに20人を超えて28人に上り、首都圏難関私立大の合格者数も前年の9人から24人に増えた。更に、例年なら志望校を下げていた成績中位層が最後まで志望を貫き、首都圏の中堅私立大に次々と合格。現役合格率は前年度に比べて約10ポイント高い79%となった。また、浪人生になった生徒も、合格を手にした上で更に上を目指す者が多く見られた。

「教師の思いを受け止め、『たとえ合格できなくても第1志望は受験する』と考えて実行した生徒が多かったことが良い結果につながりました」（佐藤先生）

現在は、指導方法が変わったことを知った上で入学するため、初めから授業態度は良く、生活面の指導はほとんど必要なくなった。

こうした生徒の変化を喜ぶ一方で、教師が頑張るほど生徒が自ら力を出そうとしなくなる面があることにも気付いた。例えば、生徒会活動や学校行事などは、以前の方が力強かったと感じる場面があるという。また、保護者からは依然として、「教師が指導し過ぎではないか」といった声が寄せられている。

しかし、同校は、現在の指導はあくまでも通過点と捉えている。

「『放っておいて、生徒が自ら気付くまで待つ』状態から、『教師が働き掛けて生徒に気付かせる』状態に進みました。学校の主役は生徒ですが、教育の主体は生徒ではなく教師

です。そのことを踏まえた指導が、一連の改革を経てようやく出来るようになったと思います。次の段階として、『生徒同士が影響し合って気付く』状態に進みたいと考えています」（佐藤先生）

生徒が互いを高め合った好例が、朝学習の広がりだ。改革の初年度、4月に行ったスタディサポートの結果が良かったために夏休みの学習対策が手薄となり、11月の模試の結果が大幅に悪化した。そこで、11年度は1年生と3年生で「始業前の朝学習」を取り入れた。1年生はスプリングセミナーで得た緊張感を保つため、担任が監督。3年生は昇降口に国語、数学、英語のプリントを置き、自主学習できる態勢をとった。すると、2年生の生徒から「自分たちも朝学習に取り組みたい」との声が聞かれるようになり、その思いを後押しする形で、2年生にも朝学習が導入された。2年生には監督が付かないが、大半の生徒が始業前に取り組んでいる。今では、「前年度の実績を超えたい」という、学年間の良い意味でのライバル心も、指導改善の原動力の一つとなっている。

「いかに自然な形で生徒が気付くきっかけをつくり、本来の意味での自主自立へと導くか。我々教師の指導力が問われる、非常に難しい指導だと思います。しかし、教師が本気でやろうと思えば、生徒は変わると信じて取り組んでいきます」（坂江先生）

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2010年6月号指導変革の軌跡「新潟県立高田高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)